

事実と教訓

— トゥーキューディデース第7巻29～30章について —

田 中 博 明

1

トゥーキューディデースは、第1巻140章で「アマトース」という言葉をつかっている。戦没者追悼のペリクレスの葬送演説のなかにそれがみられる。すなわち、

事件の成り行きというものは、人間の考えもそのようであるのと同じく、しばしば、わけのわからない進路を取る。われわれが、人間の考えによっては予測できない(amathôs)結果になるものを運命のせいにするのを常とするのも、そのためである。

以下の小論は、トゥーキューディデース（以下ツキュディデスと表記）の未完の大作全8巻のうち、恐らくただ一度だけみられると思われる「アマトース」という用語に触発されてのものであり、「わけのわからない進路」を取り、「人間の考えによっては予測できない」結果となった事件を対象とするものである。すべての歴史上の出来事(historia rerum gestarum)は、人間の知性によっては予測不可能な事態をまねくものであるけれども、いわゆるミュカレッソス事件は、その生じた形態と進行の偶然性において少なからぬ関心をひくものである。

ミュカレッソスでの出来事(res gestae)は、第7巻29～30章であつかわれる。第7巻は、いうまでもなく全体としてはシケリア遠征を叙述したものである。ミュカレッソス事件は、叙述の直接の対象ではなく、あくまでも本筋のシケリア遠征の逸脱ないしエピソードにすぎない。にもかかわらず、ツキュディデスは、この事件を記録し、少なからぬコメントを残している。逸脱ないしエピソードとはいえ、この事件の記述は内容においても、ツキュディデスの叙述技法においても、看過できないものをふくむように私には思われる。

ミュカレッソス事件は、端的に言って、いわれなく殺されたひとびとの記録であり、人間の考えにとってアマトースな経過をたどった事件である。

叙述されているのは、いささかもミュートス的なものをふくまない、戦時下の出来事である。それ以上のものではない。にもかかわらず、この部分はツキュディデスの資質ないし特別な心理のニュアンスによって色付けされており、他の箇処のどこもが引き起こすことのないような悲哀の念を引き起こす。偶然の運命の成り行きがきわめて非条理であるということを想起させるからであり、いわば運命の一撃とでもよばれる事態を感じさせるからである⁽¹⁾。偶然性の狡智といってもよい。

ある政治思想研究者が、ツキュディデスの用語の一部をかりて、この部分を“most terrible”といい⁽²⁾、厳正な歴史研究者が“wild”と規定している⁽³⁾のも、もっともなことなのである。この箇処は2500年余の時の経過の中でわれわれにとってますます身近な、考慮に値いする事態となっているように思われる。

2

ミュカレッソス事件は、ペロポネソス戦争の19年目（紀元前413年）の夏に起こったものである。事実の経過を箇条書ふうに要約すると、

(1)デモステネスの、第2次シケリア遠征に間に合わずに遅れて到着したディエイトレペスの率いるトラケーの傭兵軍は、ただちに送り返されることとなった。

(2)アテナイ人たちは、指揮官ディエイトレペスに、帰路できるかぎりの損害を敵側に与えるように命じた。

(3)傭兵からなるこの軍団は、まずタナグラに上陸し、その土地の物資を略奪した。次いでエウリポスを渡り、ボイオティアに上陸、ミュカレッソスに向かった。

(4)かれらは、ミュカレッソスから約3キロメートル離れた地点にあるヘルメス神殿に野営した。そして気づかれることなく夜を明かした。

(5)夜明けと同時にかれらは行動をおこし、無防備の小都市を急襲した。

家屋・神殿を劫略し、家畜・人間の区別なく殺戮をほしいままにした。

となる。要約でみるかぎり、戦争の遂行とともに、どこにでも生じる出来事の推移の叙述にすぎない。事実の列記そのままである。

つぎに以上の箇条に拠って、その内容をみてみよう。まず(1)のトラケーの傭兵について、とりわけ「ただちに送り返されることになった」についてである。トラケーの傭兵についてはすでにこの巻の27章に言及がある。「また、その同じ夏、デモステネスに隨行してシケリアに航海することになっていたディーオイ族に所属し、帯剣を常とするトラケー人の楯兵1300名も到着していたが、かれらはやって来るのがあまりにも遅かったので、アテナイ人たちは、かれらを出発して来たトラケーに送り返すつもりであった」(7.27)といわれている。

この種族の名は、すでに戦争の初期にもみられるものである。シタルケスのマケドニア攻撃(2.95-101)の項にその名がみられる。スキュタイ近傍のトラケーの山岳地帯に住居し、独立で国をなす者たちであり、風俗、例えば武器の帯同の仕方などもスキュタイ人と似ていることが指摘されている。かれらはみずから進んでも軍役に従事したが、その一部は「報酬を受けて従軍を承知した」(96)といわれる。傭兵としてすでにしばしば出撃している剽悍な精鋭の武装集団を思わせる。このたびのディエイトレペスの指揮する傭兵たちもこれにちかい戦闘集団であったと予想される。

送還決定を申し渡された戦士たちの心的反応などについては、ツキュディデスは何も伝えていない。叙述は「ただちに送り返されることになった」と、そっけない。遠路を経てやって来たからには疲労度もかなりのものであったと思われる。また、戦争に参加することによって当然に得られたはずの失われてしまった報酬に対する絶望など、戦士たちの胸には不平や悪感情がわだかまり複雑な心理であったにちがいない。この点についての歴史家の沈黙は、後に生ずる事態を考えてみる時、叙述の点で想像力を刺激する。発散させ切れず心にわだかまる怒りは、時と所を得るならば無方向に出口を見出す。人間は、危険な状態では凶暴になるものであり、自由勝手にふるまうことの条件が与えられると邪惡の性格をほしいままにする。

「ただちに(euthus)送り返されることになった」のは、「遅れて到着した」ことだけにその理由があるのではなかった。むしろ本当の理由は、当時の経済的事情によるものである。27章では、送還の理由として申し立てられているのは、「かれらは1日ひとり1ドラクマをもらっていたので、デケレイアから攻撃をおこされる戦争のために、かれらを留めておくことは、莫大な費用がかかると思われたからである」とはっきりと記されている。デケレイア占拠はアテナイに多大の影響を与えていたのであり、当時の財政の窮乏はきわめて深刻かつ重大な問題であった。貢税にかんする改革などがなされているが、それは何

の役にも立たないほどであったのである。28章で、ツキュディデスは、当時の経済状況の遠因についてまず語り、次いで近因については「（以上の事柄のゆえに、）また、当時デケレイアがはなはだしい痛手を与えていたことやその他一般に莫大な出費がふりかかってきたゆえに、かれらは財政的にどうすることもできなくなったのである」と分析し、「出費は以前と異なり、収入が無くされつつあったのに、戦争がより一層大規模になっていただけに、それだけますます大きくなっていったのである」と結論付けている。ディエイトレペス軍の即時送還もこのような経済状況による。

ツキュディデスも端的に「ただちに送り返される」こととなった理由を、「かれら（アテナイ人たち）は差し迫っている財政的窮乏のゆえに、費用をかけることを望まなかったのだ」と記述している。

してみるとこの「ただちに」という用語は、深い背景をもつものであり、ここにも、戦争の叙述を始めるにあたって経済の発展構造分析「考古記」(1.2-20)を序章としたツキュディデスの叙述の特性のひとつをみることができよう。

傭兵軍団を「ただちに」送り返すことを決定したアテナイ人たちは、同時に、命令を与えた。(2)その命令とは、かれらが帰還の途中に、敵側にできうるかぎりの損害を与えるようにという内容をもつものであった。この命令はミュカレッソスに「アマトース」な事件をひき起こす間接の理由となる。この場合にいわれているのは、「海岸沿いに航行していく時に、かれらはエウリポスを経過して移送されることになっていたのだ、いかなることであれ、できるのであれば、かれらの手で敵に害を与えるように、と、命令を下した⁽⁴⁾」ということだけである。ミュカレッソスという名称は、あらわれていない。襲撃の必然性（可能性）は少ない。この部分でみるかぎり、事件発生は偶然性の度合いが高いのである。

アテナイ人たちの意向に従い、(3)ディエイトレペスは、タナグラに部下を上陸させて「急遽、いくばくかの掠奪行為を行った」。「急遽」という用語(dia takhous)が注意をひく。帰路を急いでいる状況が示されるからである。以下の叙述全体と関係づけて、他方、倉皇として物事が破局にむかって進行している感じが出ているとも解釈できる。しかし、かれらはたんに先を急いでいたと、解釈したい。タナグラの掠奪完了後、かれらは夕刻にはエウボイアのカルキスを経て、エウリポスを渡り終えている。すべてが早いテンポで進んでいる。夜には、(4)ミュカレッソスにちかい約16スタジオンの地点に幕営しているのである。偶然である。

この早すぎた行動がミュカレッソスに災害をもたらす。ミュカレッソス事件を考えてみる時、この偶然性は無視できない。

トラケーの戦闘集団は、ヘルメス神殿で「気づかれず(lathôn)」に夜を明かす。この「約16スタディオン」という距離の明示も、つぎに生ずる事態を考慮に入れると、いくぶん冷酷なひびきをもつものであり、歴史家の叙述法の冴えを感じさせる。

そして「夜明けと同時に」かれらは、大きくはないそのポリスに迫ることになる。襲撃の状況をツキュディデスは、この章の他の部分よりもかなりくわしく報告している。まとめてみると次のようになる。すなわち、

(i)トラケー人たちは、海からこのように遠い場所にある奥地へと攻めのぼり、自分たちを攻撃する者があるなどとは、夢にも思わないで何の警戒もせず油断している、ミュカレッソスを襲った。

(ii)ミュカレッソスの城壁は脆いものであった。その上、安心していたために、市の門は開かれたままであった。とくに城壁は崩落したまま修復されず放置されていたところもあり、しかも低く築かれていた。

(iii)そのような状況のミュカレッソス市になだれ込んだトラケー人たちは、家屋をも神殿をも荒した。そればかりではなく、人間は老若の別なく容赦しないで、出合うものを片っ端から次々と殺して行った。子どもも女も、そればかりか家畜もその他、目にふれる生きものを殺戮した。

(iv)あらゆる種類の破壊がおこなわれ、市はパニックにおちいり混乱の極に達した。かれらはそのポリスの小学校を襲撃し、学童たちを殺した。

のである。

このような事態をある研究者は、「無防備都市ミュカレッソスでのワイルドな虐殺」と規定している⁽⁵⁾。偶然の運命の非条理を想起させる叙述であり、人間の考えによっては予測できない結果が生じたのである。

3

以上、いわゆるミュカレッソスにおける出来事(res gestae)の概要をみた。次に(i)～(iv)の部分について見てみよう。

まずは(i)夜明けとともに攻撃を受けることになったミュカレッソスの状況

である。かれらは自分たちが敵の襲撃の対象となるとは、「夢にも思わなかった(aprosdokêtois)」のであった。かれらにとっては、まさしくアマトースな、つまり予測不可能な事態が生じた(amathôs khôrêsai)のである。海岸から離れてもおり、何の警戒もしていない。侵攻を予測できなかったとはいえ、戦時下体制である。当然のむくいを受けたのである。警戒を怠り、防備の策をもとらぬかれらに敗北の責はある。いわんやこの戦争は地域紛争ではない。いわばこれは当時の全面戦争であり、無関係な地域など、無かったはずである。かれらは、にもかかわらず、やすやすと、侵攻を受けている。

(ii)の部分の城壁の不備の叙述、とりわけ、「市の門は開かれたままであった」との指摘は、何とも無念をさそう。このような状況であれば、(iii)の事態も当然の推移をたどる。にもかかわらず、ツキュディデスは、事実のみを叙述し、住民たちを責めてはいないように思われる。無防備の状況に対しても、「海岸からこれほど奥地まで攻めのぼる敵などいない」という安心感に対しても、それを容認しているようなところがある。上天気の日には、嵐のことは思ってもみないという人間の本性を肯定しているのである。これは何故であろうか。事件の成り行きというものは、わけのわからない結果になるということを見通していたからではなかろうか。少なくともここには生じた事態に対するツキュディデスの驚嘆があるように思われる。

「市の門は開かれたままであった」の部分は、他の事件を想起させる。ツキュディデスは、戦争開始初年の事件で、市門についてふれている。叙述の相違をみるためにふれておきたい。テーバイの300余名が、夜明けにプラタイアに侵入した箇処である。そこでは警戒を怠っていたからの市門開放ではない。ここでは市門は、プラタイアの内通者が招じ入れたことになっている。市門には警備の者もおらず、テーバイ軍は「気づかれることなく(elathon)」やすやすとポリスに侵入する(2.2)。結果は、にもかかわらず、招じ入れた一党派からの説得を聞き入れず、逡巡している間に、テーバイ軍は、アテナイ側に立つ党派の巻き返しによって敗北を喫する。

このテーバイのプラタイア襲撃事件も、いってみればアマトースな推移をたどったものである。しかし、この場合のツキュディデスは、時勢をみることもできず、かつ果敢な行動をとらなかったテーバイ勢に対して、きわめて冷淡である。この部分には、戦場の耳を聳する雄たけび、女たちが家々から投げ落とす石のつぶて、夜中の激しい雨、暗闇の中の泥濘を血路を求めてさまようテーバイ勢の一部など、情景のひとつひとつについてヴィヴィッドな描写がつづく

のであるが、ツキュディデスはただ事実のみを記す。敗走者たちに対して何の同情もしていない。叙述の一部をとり出してみると、「大部分の兵士たちは殺された」「助かったのはごく少数であった。他の者たちは、散り散りとなって城内のあちこちで殺された」「180名の捕虜たちも、ただちに、処刑された」「使者がみたのはもの言わぬ死体だけであった」(2.4)と冷徹である。

このテーバイのプラタイア襲撃は、本筋からの逸脱でもなければ戦争のエピソードでもない。これは明白な「30年講和」の侵害であり、この事件によって戦争の開始が早まるのである。戦争の推移を決定する重要な出来事であり、メレシッポスが国境で、「今日よりギリシア人にとって災害が始まるであろう」との言葉を発するのは、この事件の直後である。テーバイ勢は、当然、ミュカレッソスにおけるトラケー人たちのように行動することもできたはずである。にもかかわらず、そうはならなかった。プラタイア侵入事件は、決行した以上は徹底的にやり中途半端はよくないという教訓を残す。以上は市門開放に関わるひとつの例示である。

(iii)では、市門開放のポリスに侵入したトラケー人たちの行動が叙述される。「人間は老若の区別なく、すべて次々と殺す(*pantas hexês kteinontes*)」が、状況を端的に示している。あまつさえ、女性も子どもも殺戮の対象となる。目にふれるものは、生きもの(*empsukha*)すべてを殺したと記述されている。目を覆うべき状況である。人間とは、自由勝手にふるまうことのできる条件が与えられると、かくも凶暴な性格をほしいままにするものであろうか。人間は人間に対してこのような振る舞いにおよぶのであろうか⁽⁶⁾。ツキュディデスはここでミュートスをかいているのではない。事実を叙述しているのである。しかし、ここには、人間の本性(アントローペイアー・ピュシス)のあるがままを叙述することに奇妙な情熱をもつひとりの歴史家の面目をはっきりとみることができないのか。「事件の成行きというものは……わけのわからない進路を取る。」(1.140)とは、かれの考えの通奏低音である。

しばしばツキュディデスは、事実のみを冷静に記録する歴史家であるといわれる。それを否定することはできない。ではその態度や心情は、いかなるものに根ざしているのであろうか。かりに、知性第一主義と倫理的実証主義とっておこう。ここでいう知性第一主義とは、感情をまじえない、感情にゆり動かされない知的な目で人間の行動のさまざまの相を永遠の相のもとで観ることである。倫理的実証主義とは、人間の本性は悪であり、本質的な部分は法とか宗教とか慣習とかという人工の枠によっては抑制されない以上、人間のありよう

を赤裸々に叙述しようとする心性である。ミュカレッソス事件を報告するにあたりツキュディデスはこの態度をつらぬいているように私には思われる⁽⁷⁾。事実をのべる。述作しない。生じた出来事(res gestae)の明確な記録は、それを知ろうとする者を知的に啓発するという信念。つまり歴史の教訓を読む者の側に残すのである。

とはいうもののミュカレッソス事件では自身のコメントを記している部分が2, 3ある。たとえば、トラケー人の性格の分析である。そこでは「トラケー族というのは、バルバロイの最たる者と同様に、勢いを得た場合には、この上なく殺傷をこのむからである」(7.29)といわれている。通念ではあり説得性をもつとも思われるけれども、これは論過である。すでにのべたごとく、責任の大部分は「ただちに送り返されることとなった」事態にあり、それにともなうフラストレーションにある。言を継げば戦争の予測できぬアマトースな経過進行に責を帰すべきであろう。始動すれば加速し、留まることなく進む。

ツキュディデスは、戦争の進展につれて残虐行為の深刻化を指摘している。ポティダイアの場合(2.70)、ミュティレネ事件における「全員死刑に処すべし」とのクレオンの発言(3.36)、スキオーネの場合(5.32)、メロスの場合(5.116)などをみると、確かに巻を追って残虐性の度合が増加していることがわかる⁽⁸⁾。非は、戦争自体が内包する力動性によるものではないか。戦争は有無を言わせぬ圧倒的な教師(2.82)なのである。その残酷性の極点が29章の結末にみられる。(iv)あらゆる形で進行する悲惨な状況のなかで、とくに印象的な部分である。

その時も、ありとあらゆる破壊行為がおこなわれており、他のことでも大混乱を呈していたのであるけれども、とりわけかれらは、そのポリスでもっとも大きい、ちょうど学童が入り終わったばかりの学校を襲撃し、すべての子どもたちを斬り殺したのであった。

この部分に対しても、ツキュディデスはコメントを付している。すなわち、

このような事態は、ポリス全体にふりかかってきた惨事としては、いずれにも劣らず、予測できない、恐るべきものであった。

と。ツキュディデスはここで、ミュカレッソス事件が、戦争中を見渡しても、いずれにも劣らない前例のない惨事であったとのべている。アマトースな事件

であるというのである。注目しなければならないのは、「恐るべき(deinê)」との用語である。この用語は多義的であり、いろいろな意味で語られるものではあるけれども、この場合何ら感情をふくまぬ知的なひびきをもつように私には思われる。つまり、コメントを付してはいるが、ツキュディデスはここで事実のみを赤裸々に示しているのである。知的なひびきをもつといったのはその意味である。述べられているのは、いまだかつて例がなかったほどの災害(calamity)であったということだけである。それゆえにここでは事件の遂行者であったトラケーの傭兵軍もなんら断罪されていないし、戦時中であるのに襲撃を夢想だにせず策を講じなかったミュカレッソスの人々も嘲笑されてはいない。突然の予期せぬ瞬間に到来し、恐るべき暴威をふるわれたポリスの状況を書きとどめているだけである。歴史家はここで予測しない進行をとった事実に対して言を失っている。「恐ろしい(deinê)」としかかいていないのである。

ツキュディデスのこの用語(xumphora……deinê)は、たんにこの部分のみを取り出して解釈されてはならないのであり、他の部分と対比して解釈されるべきものである。それによってツキュディデスのミュカレッソス事件に対する考えが明確になるように私には思われる。それは30章の終わりの箇処、つまり、

その大きさからみて、この戦争中のいかなることにも劣らず、哀悼されるに値いするものである(olophurasthai axiôî).

という表現である。

この用語(olophurasthai)は、ホメロス以来多くの著述家の作品に頻出するようにありふれたものである。ここでは「哀悼される」としたが、「悲嘆される」でも「同情を呼ぶ」でも「憐れまれる」でもよい。しかし、ミュカレッソス事件の文脈でよむ場合、かなり強い意味を込めてもよいであろう。

4

この「哀悼されるに値いする(olophurasthai axiôî)」は、ミュカレッソスの惨事を知り、テーバイ勢が救援に駆け付け反撃に転じ、トラケー軍に多大の損害を与えた記述の後に、いわば総括として、最後に付けくわえられているコメントである。

30章ではまず双方側の戦況と戦果がのべられている。詳細ははぶくが、トラ

ケー側の死者は1300名のうち250名であり、テーバイ人など救援者側のそれは約20名と数値が示されている。反撃の成果としては戦勝であろう。しかし、ミュカレッソスについては、「そのかなりの部分が殺された」といわれているだけであり、その数値はあげられていない。「その（ポリス）の大きさからみて、この戦争中のいかなることにも劣らず(oudemias hêssôn)」とあるのをみると、殆ど壊滅という予想が成り立つ。「その大きさ」をポリスとする説と悲惨とする説があるが、どちらでもよい。十分に「哀悼されるに値する」のである。

にもかかわらず、ツキュディデスはそれ以上の記述をしていない。これは謎であり、幾分の物足りなさを感じさせるものではなかろうか。というのは、かれは他の箇処では、このような事件の場合かなりの文字をつかっているからである。例えばケルキュラ島の事件については、事実の記述は言うまでもなく、「内乱の一般的考察」(3. 82)までを付しており、また、アテナイにおける疫病の流行(2. 47-54)については、まるで精神分析の臨床家のように克明に事実を記述し、過剰とも思われるほどの解釈と人間の行動を描写しているのである。他にも例は少なくない。メロス島事件の場合がそうである。事件としては小事件であるにもかかわらずかなりの分量をアテナイ側の使節とメロスの要職者たちの外交交渉の談話につかっている(5. 114-116)。この事件もいわばエピソードないし逸脱といってもよいものである。しかし、これらに対しては次のような、いわゆる論賛までを付しているのである。してみると、

これは人間の自然的本性が同じであるかぎり、繰り返しておこなわれることであり、未来においても常におこなわれるにちがいない(3. 82)

内乱の間、多くの、そして、つらいことが各々のポリスにふりかかったものであり、このようなことは人間の自然的本性が同じであるかぎりおこるものであるし、また未来においてもつねにおこなわれるものであろうけれども、それぞれの状況に変化が生じるに従って、より以上であったり、もっとおだやかであったり、その現象する形態がさまざまであったりするのである(3. 82)

ひとびとは極度のわざわいに窮すると、どうなるか自分でもわからないために、神のことも人間のことも無視するにいたるものである(2. 52)

われわれが要請し、かつ、おこなっていることは少しも神にかんする事柄についての一般の信仰やかれら自身にかかわる事柄についての意欲には反していないのであり、常に自然本性的に、強い者が（弱い者を）支配するものと考えているのである(5.105)

といった調子なのである。

しかし、奇妙なことに、ミュカレッソスの場合にはこのようなツキュディデスは姿を消しており、いわば以上のように、事実から帰納的に導き出されたような公理的表現は提示されていないのである。この沈黙と空白、換言すれば、この抑制は何によるのであろうか。あまりにもあっさりし過ぎているのである。

もっともここに書かれているのは、いわゆるツキュディデスの「メモランダム」にすぎず、やがては書き足されるはずの極小部分であったとすれば、物足りなさも解消する。テキストがない以上は何も言えない。しかし、ツキュディデスの他の部分の記述とくらべるとき、あえてその資質を考慮に入れるとき、この事件にこそうってつけの舞台装置がしつらえられていたのに、と惜しまれるのである。沈黙は沈黙のままであり、謎は謎である。ツキュディデスは謎をもらさない。しかし、それゆえにこそ、この沈黙は多くを語っているように思われて私の関心をひくのである。

にもかかわらず、「他に例がない(oudemias hêssôn)」という部分⁽⁹⁾、そして「ポリス全体にふりかかってきた惨事としては、いずれにも劣らず、予測できない、恐るべき(deinë)ものであった」とする叙述と「この戦争中のいかなることにも劣らず哀悼されるに値いする(olophurasthai axiôî)⁽¹⁰⁾」とを対置させるとき、ツキュディデスの意図は十分に達せられているように私には思われてくる。ここにははっきりとimplicitな感情移入がなされているからである。自己投影ないし、sumpatheia（同情）をみることができる。ツキュディデスは、事件の推移はつねに測りがたい過程をたどる(1.140)と明言し、そのような絶望の折りには人間の技術などはまったく力をもたない(2.47)ことをよく知っていた。突然の予期せぬ進行によって、いわれなく殺されたひとびとの事件を知ったとき、かれは事実を記録するだけで十分であると考えたのである。しかも、この事件は因果的に説明することはできないものであり、探究をかさねれば無限に複雑であり、この場合、Aの事態がBの事態をひき起こすという分析は棄てなければならない性格の事件なのである。アマトースな事件である以上、事実の記録だけで十分であるとツキュディデスは思ったにちがいない。

教訓を引き出すのは他者に、つまり読む側に託されるのである。

思うにツキュディデスは、追放以来、受け身で生きるという生き方を強いられた人間のはずであった。ミュカレッソスの受け身だけの事実に対し、少なからぬ共感と公憤をおぼえたにちがいないのである。にもかかわらず、ツキュディデスは、加害者を断罪してはいない。

ここにいる歴史家は、人間の自然的本性と偶然性の問題⁽¹¹⁾という永遠の課題を前にして、驚きをかくせないのである。私も、これ以上、過去の秀れた記述を簡略にしたり、水増しすることは避けなければならない。

ツキュディデスは第1巻22章で次のように言っている。すなわち、

今ここに起ったことの確実なところは何であったかを見ようとする人が将来出て来るとして、そのような場合にも、またこのようなことやこれに近いことは、それが人間の自然の性質〔アントローペイアー・ピュシス〕にもとづくものならば、将来もまたいつか再度起るだろうから、そのような場合にも確実のことを見てみたいと思う人たちが、この著書を有益だと判定してくれるなら、それで充分だろう⁽¹²⁾。

と。

注

(1) 「運命」という用語をここに記すのは、論の展開上、疑義をまねくかもしれない。用語使用の誤まりは、内容の誤まりに帰結するからである。しかし運命という用語をすてることはできなかった。「偶然」という用語とのかかわりの故である。というのは、ミュカレッソス事件の場合、ツキュディデスの他の場合と同じく、偶然性と必然性ないしは可能性との原理的考察を要請されるように思われたからである。すでに「歴史記述と偶然的要素」久保正彰（『思想』1980年11月号、岩波書店）、「歴史記述における偶然的要素——『ピュロス戦記』をめぐる」久保正彰（『東京大学文学部研究報告』第7号、1982年）などがある。なお他注(11)参照。九鬼周造は、「偶然性の問題」で、

偶然性はその極限においては必然性と結合し、その結節点に「運命」が成立する構造を分析している。

(2) David Grene, *Greek Political Theory—The Image of Man in Thucydides and Plato (Man in his pride—A Study in the political philosophy of Thucydides and Plato)*, The University of Chicago Press 1965, p. 54.

(3) F. E. Adcock, *Thucydides and his History*, Cambridge U. P. 1963, p. 12.

(4) 「命令を下した」の部分には幾分の解釈の余地があろう。従来の解釈に従い「命令した」「言い付けた」ととるけれども、「害をくわえるように命令を下した(eipontes……blapsai)」の eipontes に強制的なニュアンスを読み取りすぎることは、直接の行動の指示者がアテナイであることになり、事件の必然性可能性が高い印象を与える。ただたんに「害をくわえるように言った」でもとおるのではないか。偶然性の要素の濃い、この事件ではむしろ単純な意味で「～と言った」と解釈できるのではないか。この事件は、全体的に amathôs khôrêsai の面が濃い。タナグラの掠奪行為にも抵触しないと思われる。

(5) Adcock, *op. cit.*, p. 12.

(6) Karl Reinhardt, *Thukydides und Machiavelli*. in: *Vermächtnis der Antike*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen 1959, S. 207.

(7) このような解釈をする研究者にプラトン学者 Paul Shorey がいる。かれはその論攷 “On the Implicit Ethics and Psychology of Thucydides”, *TAPhA* 24(1893), pp. 66-88 においてツキュディデスの人間分析の基本的態度を ethical positivism と intellectualism とのふたつに帰している。

(8) Jacqueline de Romilly, *Thucydides and Athenian Imperialism*, Oxford 1963, p. 308.

(9) 16世紀イタリアの人文学者、ツキュディデスの最初の反訳者ロレンツォ・ヴァルラは、この部分を次のようにラテン訳している。 quae clades, adeo inopinata, adeo acerta toti ciuitati incidit vt nulla alteri magis. (Thucydidis de bello Peloponnesiaco Libri viii Laurentii Vallae, Henricus Stephanus, Anno M. D. LXXXVIII, 505.

(10) この部分のヴァルラのラテン訳は, Mycalessiorum autem pars quaedam absumpta est. Cuius civitas calamitate nullam alterius, vt in tam diutino bello, miserabiliorem reor, fuisse: adeo atrox ea fuit. である。(op. cit.)

(11) 偶然性の考察は、なくてはならないものである。この場合、偶然と運

命という問題は論の展開上広く遠い射程をもつ問題である。偶然とは、あることもないことも可能である。しかし、なくともよいものが、突然に出てくると、それが意味をもってくる。ミュカレッソス事件の場合は、なくともよいものが目立つ場合である。すなわち、あることもないこともできるような場合がそれ、つまり偶然である。つぎに偶然とは、めったにないことである。すなわち、運命の一撃などと比喩的に言われる事態がそれである。そして、つぎには何かと何かとがであう場合である。それが偶然である。あることもないことも可能であるものが、突然に現実にあらわれてくると、偶然ということに思いをいたさざるを得ないのである。このことが了解されると、運命ということも理解されられるのである。偶然的であっても、それが人間にとって重要であることが運命ということになる。ミュカレッソスの場合がそうである。いま少し、原理的にいえば、偶然性と可能性とは、必然性の確かなものに対しては、不完全である。しかし、それゆえにこそ、偶然性と可能性は、時によってしばしば、きわめて類似したものとなるのである。存在が可能であることは、同じく、非存在の可能を意味する。なぜならば、存在の可能は、非存在の可能であることを予想しなければならないからである。この点で可能と偶然は、同一のものと考えられる。アリストテレスは、『命題論』第12章で、「同一のものがあることも、あらぬことも可能である」（『アリストテレス全集』第1巻「命題論」（岩波書店、1976年）111ページ）と、可能と偶然とを区別しつつ、一方では、ふたつのものを同一のものと考えている。ボエティウスも、*Contingens esse et possibile esse idem significat, nec quidquam discrepat*（偶然であることと可能であることは同一のことを意味し、少しの相違もない）といっている（『ラテン教父全集』第5巻、ボエティウス「命題論註解」582）。『九鬼周造全集』第2巻「偶然性の問題」、岩波書店、1980年、224ページ以下。

(12) 『田中美知太郎全集』第12巻「ツキュディデスの場合——歴史記述と歴史認識——」，筑摩書房，昭和63年，424ページに拠る。